

## 大分岐をどう考えるべきか

京都産業大学教授

玉木 俊明

### はじめに

現在の歴史学研究において、アメリカ人の中国史研究者であるケネス・ポメランツが提唱した「大分岐」は、決して無視することができない重要なテーマとなっている。彼の主張は、現在のグローバルヒストリー研究の中心となるものである。

ここでは、ポメランツの主張はどのようなものであり、なぜ誕生し、それがどのようなインパクトを与えているのかを論じた上でその限界を指摘し、さらに新しいグローバルヒストリーについて紹介することによって、大分岐をどう考えるべきか、自身の考え方を述べてみたい。

### 『大分岐』の出版へ

かつてヨーロッパが世界を制覇していた時代があった。19世紀末から20世紀初頭にかけて、アジアやアフリカの多くの地域はヨーロッパ諸国の植民地になった。アジアに対するヨーロッパの優位は比較的短期間であったにもかかわらず、それはずっと続いていたと思われてきた。

だが、第二次世界大戦後、日本、さらには中国が高度経済成長を成し遂げると、そのような考え方に疑問が呈されるようになった。果たして、ヨーロッパは歴史上常にアジアよりも経済的に豊かだったのだろうか、と。その時、ヨーロッパの比較対象として、日本ではなく中国が選ばれたのは、中国の世界史上の重要性を考えれば、当然のことだといえよう。

このような時に、グローバルヒストリーが提唱され、その中心になったのがイギリスの著名な経済史家パトリック・オブライエンであった。オブライエンの研究手法の特徴は、「比較史」にある。オブライエンは1976年、現在の天皇陛下のオックスフォード大学留学時代の指導教授であっ

たピーター・マサイアスとの共著論文で、イギリスはフランスよりも一人当たりの税負担が大きかったが、租税システムがすぐれており、経済成長率以上に税収が増えたため、イギリス国家は借金を返済することができたという論文を出したことで有名になった。

そのオブライエンが、国家ではなく、より大きな地域を比較する方向での研究を進めたことは驚くにあたらない。オブライエンは歴史研究を進めていく上で、比較史が重要であると主張してきた。

このような潮流を最も端的に表した書物こそ、ケネス・ポメランツが2000年に上梓した *The Great Divergence* (川北稔監訳『大分岐——中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』名古屋大学出版会、2015年)である。21世紀の歴史学の展開に最大のインパクトを与えたのは、ほぼ間違いなく、20世紀最後の年である2000年に出された同書である。同書はさまざまなインパクトを多数の歴史家に及ぼし、われわれはこの書物の影響から今なお逃れられていないのである。

ポメランツは、ヨーロッパ、とくにイギリスと中国を比較する。ポメランツによれば、1750年頃まではヨーロッパと中国のどちらも手工業にもとづく経済成長を経験しており、その時点で「驚くほど似ていた」社会であった。だが、それ以降はヨーロッパが産業革命に成功したために大きな差がついた「驚くほど違う」世界が誕生したのである。

中国もヨーロッパも、18世紀後半に人口が増大したことに起因する経済的危機に見舞われた。そのなかでヨーロッパ、なかでもイギリスが国内にエネルギーとして石炭が大量に埋蔵されており、さらに新世界の広大な土地を活用することができたので、産業革命を発生させることができた。

ヨーロッパ、イギリスはとくに大西洋経済開発

による利益を大きく利用することができた。この海の広大な資源は、ヨーロッパに与えられた天からの授かりのものであった。

すなわち、イギリスに石炭があり、大西洋経済を開発し、新世界の資源を利用できたからこそ、ヨーロッパ、なかでもイギリスは、中国経済に大きな差をつけることができたのである。この時、「驚くほど違う世界」が誕生し、二地域の競争はヨーロッパの勝利で終わった。これが、ポメラントの主張の骨子である。

## 有機経済から無機経済への転換 オブライエンの議論

ポメラント以降、いく人もの研究者によって大分岐に関連する議論がなされてきた。その中心は、カリフォルニア大学に所属する人々であり、彼らは「カリフォルニア学派」と呼ばれる。

大分岐論に関してはそれ以外には多数の研究が存在するが、そのほとんどはポメラントとは異なった角度からこの問題について論じたものであり、ポメラントの論に対して真正面から議論を挑んだのは、2020年に出版されたパトリック・カール・オブライエンの書物であった（『大分岐論争』とは何か——中国とヨーロッパの比較』玉木俊明訳、2023年）。以下、彼の主張をまとめよう。

オブライエンは1932年生まれの高齢の歴史家であるが、現在もなお精力的に研究を続けている驚異の人物である。LSE（ロンドン政治経済学大学院）の同僚であった中国経済史家ケント・デングと協力し、中国の経済成長の研究も続けてきた。同書は、その成果の一つだと考えられよう。

中国は、長年にわたり世界経済をリードしてきた。中国の経済的優位とは、同国が有機経済（自然の恵みをベースとする経済）として世界最高水準に達していたということである。ところがヨーロッパが産業革命により無機経済（化石燃料をベースとする経済）を発展させると、経済的地位は逆転した。

一方中国では、人口圧に対応することが困難になり、有機経済の限界に達した時期に、満洲(清)

王朝が明王朝にとって代わった。そして、無機経済を中心とする経済システムへと転換することはできなかったという。

中国の農業には技術的進歩はあまりなかった。中国は、農業発展のために国家がインフラストラクチャーに投資することはなく、農業が発達しなかったため、人口圧を乗り越えて、経済を発展させることはできなかった。そのため、マルサスの罠からの離脱は不可能であった。その逆が、ヨーロッパだったというわけだ。これが、近世になり、中国よりヨーロッパの経成長率ははるかに高くなった理由である。

ヨーロッパは大西洋貿易、さらにはバルト海地方、ロシアとの貿易を拡大した。ヨーロッパは、海外から砂糖、タバコ、綿繊維などを輸入し、それがヨーロッパ人の生活水準の上昇につながった。

さらにイギリスには大量の石炭が埋蔵されており、それを使用することで、熱量集約的な製造過程を維持することができた。イギリスは、石炭を産業革命のエネルギー源にすることに成功した。ヨーロッパ諸国は、耕作地を周辺地域に拡大することで、都市化による人口増に対応した。

中国と同様、ヨーロッパも大陸間横断交易ではなく、むしろ地域内部の資源を活用することでマルサスの罠から離脱することができたという。これは、大西洋経済の台頭を重視するポメラントとオブライエンとの決定的な違いである。中国にも石炭は大量にあったが、それを動力として用い、手工業を中心とするスミスの経済成長から脱することはできなかったのである。だが、その理由をオブライエンは解明していない。

現在の研究によれば、生活水準から判断するなら、ポメラントがいう1750年頃よりも以前に、ヨーロッパの水準が中国のそれを上回っていた可能性はかなり高いことが明らかになっている。だとしても、有機経済が支配的な時代においては、中国が世界有数の経済大国であったことも間違いあるまい。

オブライエンは、ポメラント以上に中国経済の水準の高さを評価するが、ポメラントと同様、中国はヨーロッパ経済とは違い、有機経済の段階＝

スミスの経済成長にとどまり、産業社会の形成に行き着くことはなかったとする。

オブライエンは、その理由について、ポメラantzと同様、イギリスで石炭が燃料源として使えた重要性は認める。その上で、中国は、国内にあった石炭は蒸気機関の動力として使用されなかったことが、中国が産業資本主義経済へと至らなかった決定的な問題点であったと考える。しかし、ポメラantzとは異なり、大西洋貿易よりも、ヨーロッパの周辺地域の農地拡大がヨーロッパの人々に食料を供給した意義を強調する。この点が、両者の主張の最大の違いであろう。

## ポメラantzとオブライエンの議論をどう考えるのか

産業革命とは、長期的に見れば、有機経済から無機経済への転換を意味する。この転換に成功したヨーロッパと、失敗した中国に大きな経済格差がついたのは当然のことである。ただしその過程は、18世紀後半のイギリス産業革命（第一次産業革命）から19世紀末の米独の第二次産業革命に至る長期の過程である。オブライエンをはじめとするグローバルヒストリアンは、この点を重視しない。

さらに彼らは比較史という手法を採用するため、ヨーロッパとアジアがどのように関係していたのかという点を重視しない。端的にいうと、流通の軽視である。例えば銀の流通の研究者として有名なデニス・フリンとアルトゥーロ・ヒラルデスは、1571年にフィリピンのマニラをスペインが占領し、銀の流通の拠点としたことでグローバル化が始まったと考えた。メキシコのアカプルコからマニラまで、スペインのガレオン船が銀を運ぶようになったからである。

彼らは、ヨーロッパ人は膨大な銀貿易の中間商人 middleman にすぎなかったという。ヨーロッパ人は、新世界とアジアを結ぶ媒介でしかなく、主役はあくまでアジアだったというのだ。しかし、このような見方は、ヨーロッパ人のアジアにおけるプレゼンスを過小評価している。一見するとアジアを重視し西洋中心史観から免れているように

思われようが、世界史における流通の重要性を重視しない点で、大きな問題点があると指摘せざるをえない。中間商人こそ大事なのだ。ヨーロッパ人は、世界各地に出かけて、中間商人として活躍するようになった。海上ルートでの流通網を支配し、その後に産業革命を発生させ、イギリス人がイギリス船でイギリスの商品を運んだ。この点の重要性を軽視することはできないはずである。

大航海時代とは、ヨーロッパが自分たちの船で世界中に冒険をした時代のことである。ポルトガル船は16世紀には、極東のアジアにまで来ていた。それに対し、アジアの船が地中海で活躍したことは歴史上一度もなかった。このような視点は、大分岐を論じる人々ないし英米系のグローバルヒストリアンに欠落しているという印象がある。それは、彼らがヨーロッパと中国の経済水準の比較という点を中心に論じているからであろう。

英米系のグローバルヒストリアンには、それ以外の問題点もある。たしかに産業革命とは、長期的に見れば、有機経済から無機経済への転換を意味する。だが同時に忘れてはならないのは、18世紀後半のイギリス産業革命（第一次産業革命）から19世紀末の米独の第二次産業革命は一つの連続した過程であるとともに、前者は綿織物を、後者は重化学工業を基軸としていたことである。

イギリスは広大な植民地を有していたので、カリブ海諸島で栽培された綿花を本国に輸送することで、第一次産業革命を発生させることができた。しかし、植民地をあまり持たないドイツではそれは不可能であり、植民地を必要としない化学工業が発展したのだ。化学繊維は天然繊維よりもはるかに大量に生産することができ、しかも栽培のための土地が不要である。そのため、人口増のために必要とされる耕作地をより多く提供することができる。現代社会を創出したのは、第一次産業革命ではなく、第二次産業革命だったといえるのである。しかも現代社会で欠かせない調味料は、第二次産業革命の所産である。

有機経済から無機経済への転換は、二つの産業革命というかなり長期間にわたって生じた現象な

のだ。決して、イギリスの産業革命だけでこの転換が起こったのではないのだ。こう考えるなら、英米系のグローバルヒストリアンは、イギリス中心史観ということはできないだろうか。

## 新しいグローバルヒストリーから大分岐を考える

英米系のグローバルヒストリーに対して、商人・商業のネットワークを重視する研究がドイツを中心として出現しつつある。その中心人物であるマルクス・デンツェルは、近世のアルメニア商人を研究している。彼らは近世のユーラシア商業で大活躍をした国家なき人々である。近世のユーラシア商業は、彼らなしでは語れない。

17世紀初頭に、サファヴィー朝ペルシアのアッバース1世によって、アルメニア商人は、イスファハーン郊外の新ジュルファーに強制移住させられた。彼らは、新ジュルファーを拠点として、まさに世界的規模で商業に従事した。彼らのネットワークは、西欧、地中海、ロシア、オスマン帝国、サファヴィー朝ペルシア、さらには東南アジアにまで達していた。そればかりか、この広大な地域で、一人の商人が貿易をすることさえあったのだ。これは、同時代（近世）のヨーロッパでは、ありえないことであった。

アルメニア商人は、「マルシリ Marsilie」と呼ばれる通貨を主として使用していた。これは主としてスペインからレバントの港に持ち込まれたスペイン硬貨であり、アルメニア商人たちは高価な商品の購入や販売にこの通貨を使用していた。彼らは、アジアとヨーロッパの国々を結ぶ陸路と海路の組み合わせ、多様な商業文化間で商品、金銭、情報を伝達する国境を越えた活動をしていた。彼らの研究は、まさにグローバルな商人・商業システムの研究となる。

このような傾向を示す別の研究者として、アンゲラ・ショッテンハマーがいる。彼女は単に中国とシルクロードの関係にとどまらず、日本まで研究対象としている。そればかりか、中国と太平洋の関係をも視野に入れた研究を進めようとしてい

る。太平洋ではスペインのガレオン船が活躍し、新大陸産の銀をフィリピンのマニラにまで輸送し、その銀は中国に送られたことが知られ、そのため太平洋を「スペインの内海」ということさえある。しかし、現実にはスペイン以外のヨーロッパ船も太平洋交易で活動していたと主張する。

このような研究は、ポメラントの「大分岐」とは明らかに異なるが、その一方で、『大分岐』にも影響を受け、新しいグローバルヒストリーを構築しようという気持ちがあるのかもしれない。

ポメラントやオプライエンは、比較史の観点から近代史を論じた。それに対し最近出現したドイツを中心とする広域史研究者たちは、古代から現代における交易ネットワークや、ヨーロッパの拡大の時に機能した商業メカニズムを重視する。それは、新しい視点からのグローバルヒストリーとして注目に値する。

ヨーロッパは、国際的な交易ネットワークの一部にすぎなかった。そのなかでヨーロッパ人は、アルメニア商人の力をうまく利用しながら、世界中に商業ネットワークを広げていった。もともとアジア人が交易の中心地であった地域に進出し、アジア商人のネットワークを自分たちのものにしていくことで、世界の流通を支配していった。

われわれが忘れてはならないのは、イギリス産業革命の基軸となった綿は、他の誰でもなくイギリス人によって、イギリスの船で世界中に販売されたということである。イギリスは、まず流通ルートを確保し、その上で彼らの商品＝綿を世界各地で販売するようになった。

イギリス産業革命でヨーロッパ経済がアジアの水準を上回ったとすれば、このような視点は欠かせないはずである。

イギリスを中心とするヨーロッパ諸国は、蒸気船により世界中の商品を世界中に輸送した。蒸気船がなければ、19世紀末にヨーロッパが植民地帝国を築くことは不可能であった。また第二次産業革命によって、無機経済の確立に成功した。

大分岐には、このような見方が不可欠であり、今後、このような方向での研究が望まれよう。